

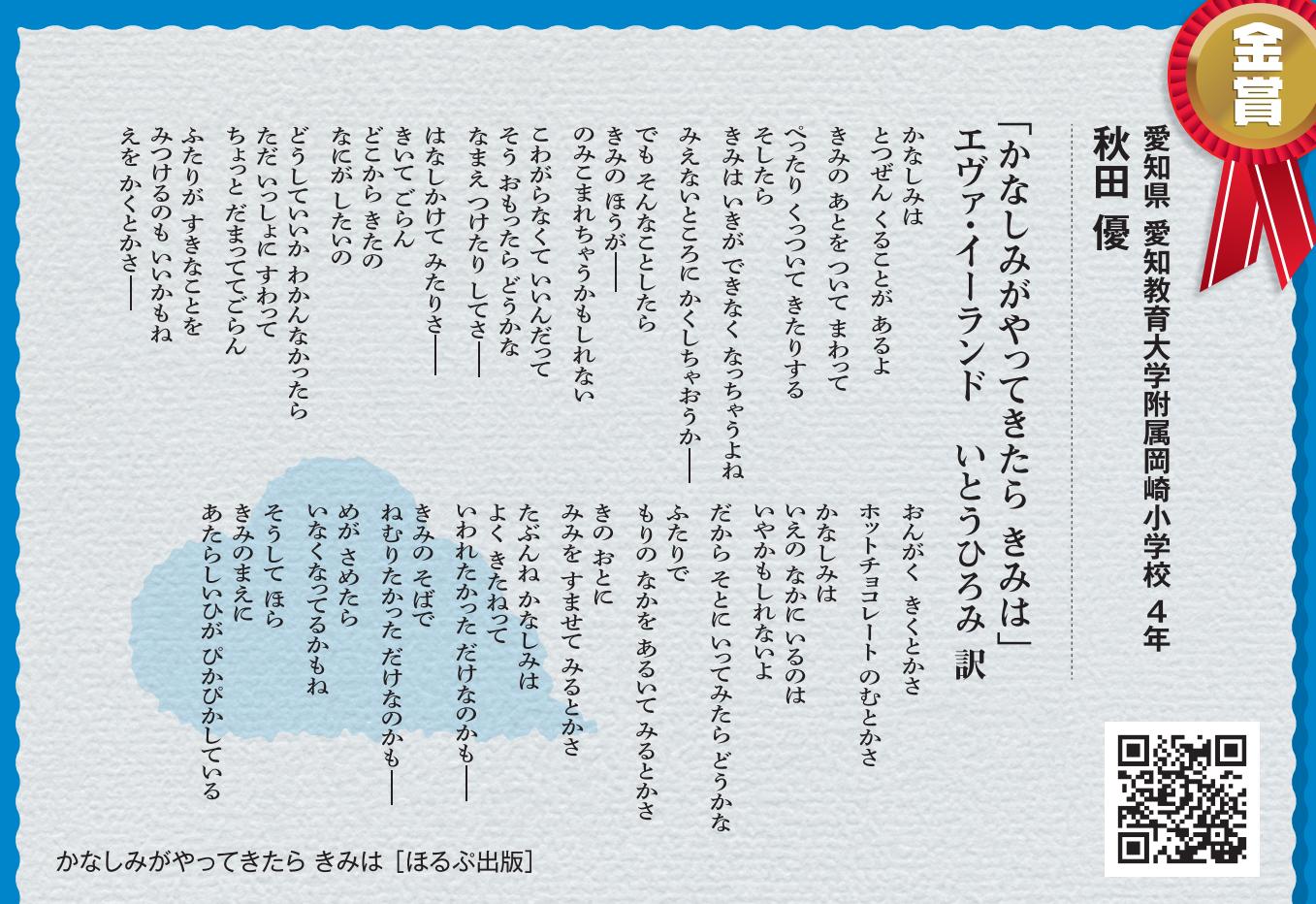
第三回

SOLASIDO

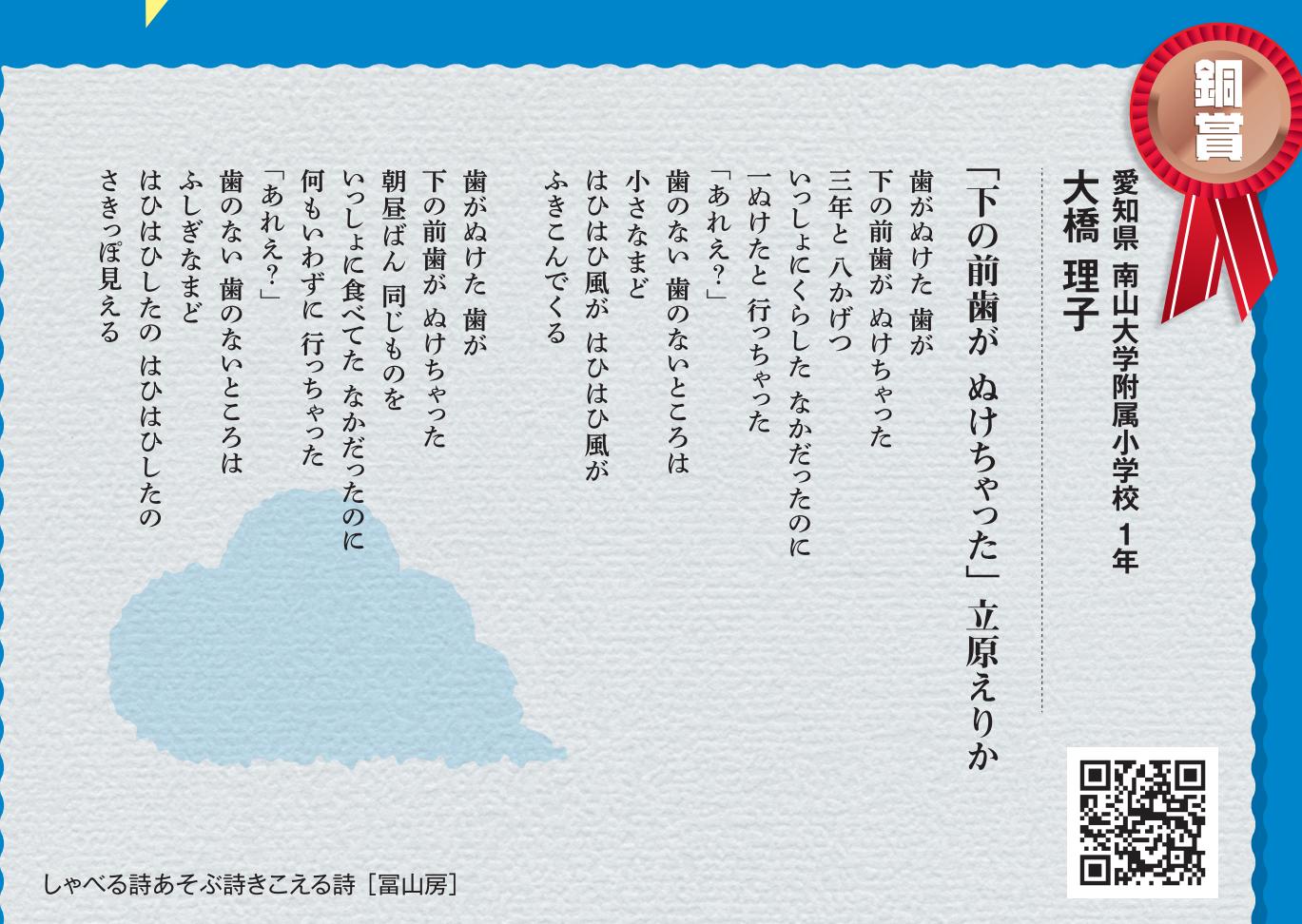
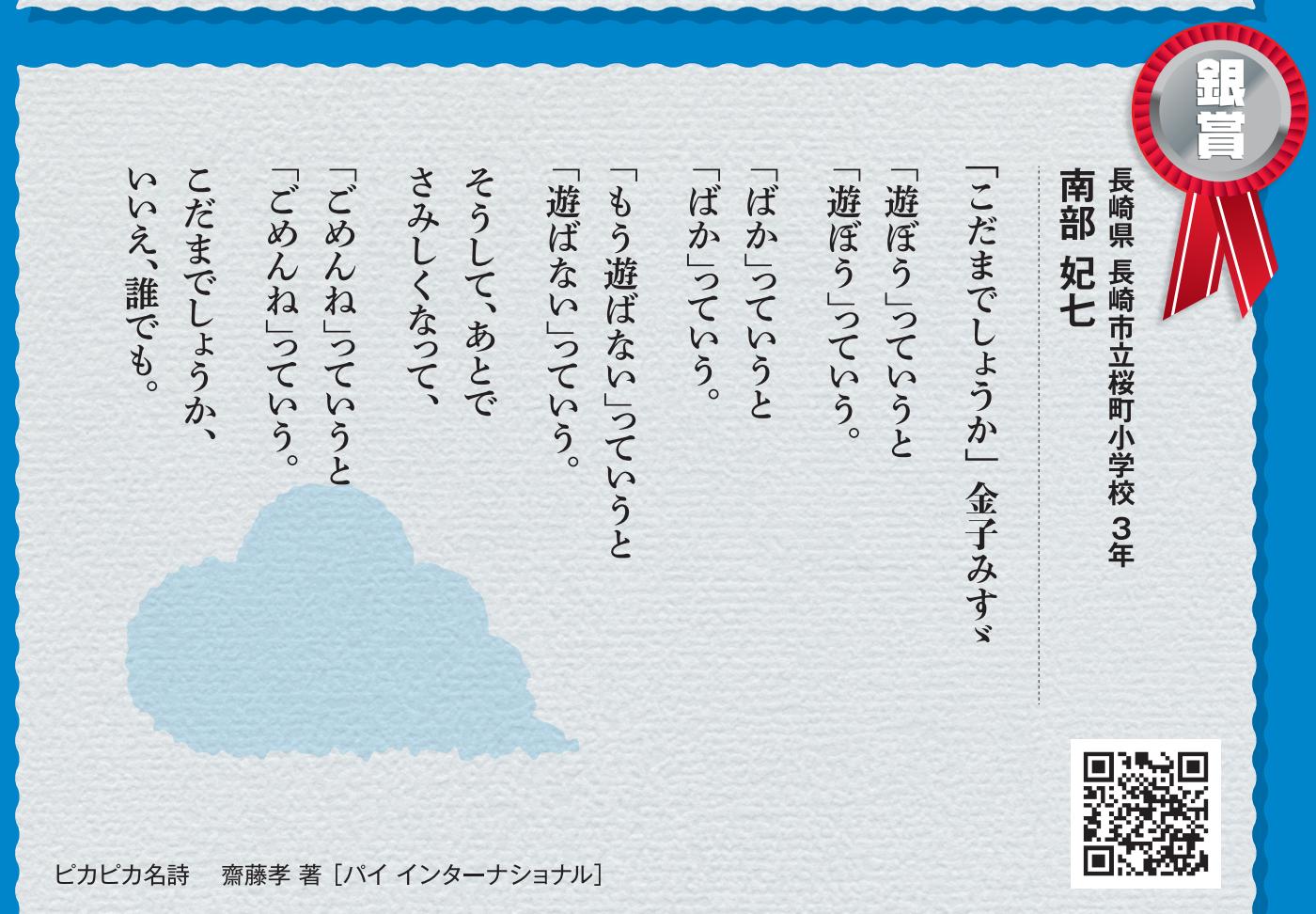
「詩のあん唱」コンクール

全国学校図書館協議会が創立70周年記念事業として立ち上げた「あん唱運動の会」から生まれた(詩を声に出す喜びSOLASIDO)、「詩のあん唱コンクール」に全国からたくさんのご応募をいただき、ありがとうございました。応募作品数185点の中から、入賞作品が決まりました。入賞16作品を発表いたします。

結果発表

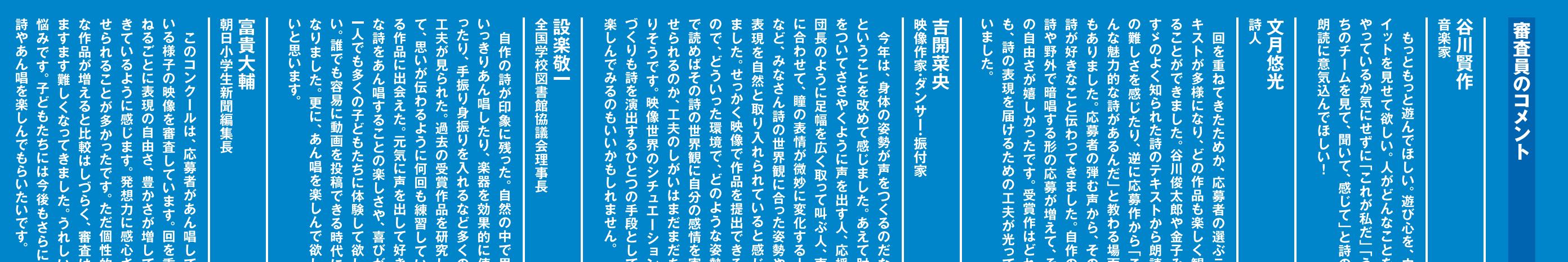


かなしみがやつてきたら きみは「ほるぷ出版」



ピカピカ名詩 齋藤孝著 [パイ インターナショナル]

しゃべる詩あそぶ詩きこえる詩 [富山房]



審査員のコメント

谷川賢作
音楽家

もつともつと遊んでほしい。遊び心を、やっているか気にせずに「これが私だ」「うちのチームを見て、聞いて、感じて」と詩の朗読に意気込んでほしい！

文月悠光
詩人

回を重ねてきたためか、応募者の選ぶキストが多様になり、どの作品も楽しく聞くことができました。谷川俊太郎や金子みすゞのよく知られた詩のテキストから朗読の難しさを感じたり、逆に応募作から「こんな魅力的な詩があるんだ」と教わる場面もありました。応募者の弾む声から、その詩が好きなこと伝わってきました。自作の詩や野外で暗唱する形の応募が増えて、その自由さが嬉しかったです。受賞作はどちらも、詩の表現を届けるための工夫が光っていました。

吉開菜央
映像作家・ダンサー・振付家

今年は、身体の姿勢が声をつくるのだなということを改めて感じました。あえて時をついてざさやくように声を出す人、応援団長のように足幅を広く取って叫ぶ人、声に合わせて、瞳の表情が微妙に変化するなど、みなさん詩の世界観に合った姿勢や表現を自然と取り入れられていると感じました。せっかく映像で作品を提出できので、どういった環境で、どのような姿勢で読めばその詩の世界観に自分の感情を寄せられるのか、工夫のしがいはまだまだあります。映像世界のシチュエーションづくりも詩を演出するひとつ手段として楽しんでみるのもいいかもしれません。

設楽敬一
全国学校図書館協議会理事長

自作の詩が印象に残った。自然の中で弾き語り、あん唱したり、楽器を効果的に使ったり、手振り身振りを入れるなど多くの工夫が見られた。過去の受賞作品を研究して、思いが伝わるように何回も練習していく作品に出会えた。元気に声を出して好きな詩をあん唱することの楽しさや喜びが一人でも多くの子どもたちに体験して欲しい。誰でも容易に動画を投稿できる時代になりました。更に、あん唱を楽しんで欲しいと思います。

富貴大輔
朝日小学生新聞編集長

このコンクールは、応募者があん唱している様子の映像を審査しています。回を重ねごとに表現の自由さ、豊かさが増していくように感じます。発想力に感心させられること多かったです。ただ個性的な作品が増えると比較はしづらく、審査ますます難しくなってきました。うれしい悩みです。子どもたちには今後もさらによろしくお願いします。